

ペシャーワル大学地域研究センター
——パキスタンにおける中央アジア研究——

登利谷 正人

パキスタン・イスラーム共和国北西部に位置するハイバル・パフトゥーンフワー州の州都ペシャーワルのペシャーワル大学地域研究センターへ2007年10月から2010年3月まで留学する機会を得た。現在のパキスタンは四つの州とイスラマバード首都圏、それから連邦直轄の諸地域から構成されている。この内、四つの州と首都圏にある主要6大学にそれぞれ地域研究センターが設置されることが1972年にパキスタン政府により決定され、その後数年の内に各地の主要大学に地域研究センターが設立され現在に至っている。

この六つの地域研究センターはそれぞれが世界全体の各地域を分割して、それぞれに割り当てられた地域の研究を遂行するという役割を与えられてきた。具体的には、イスラマバードのカーエデ・アーザム大学はアメリカ大陸及びアフリカ地域を、ラーホールのパンジャーブ大学は南アジア地域を、クエッタのパローチスターン大学は中東地域を、ジャムショーローのシンド大学は極東地域を、カラチのカラチ大学がヨーロッパ地域をそれぞれの大学に設置された地域研究センターが担当する地域として割り当てられた。そして、ペシャーワル大学地域研究センターは中央アジア地域の調査と研究を行う役割を担うこととなった。現在は中央アジアに加えて、同地域と関係の深いロシアと中国も研究担当地域に含まれている。そのため、センターの正式名称はArea Study Centre (Russia, China & Central Asia) となっている。

ペシャーワル大学の地域研究センターはパキスタンにおける、ほとんど唯一の本格的な中央アジア研究機関と言える。そこで本稿では、ペシャーワル大学地域研究センターの活動を通じて、パキスタンにおける中央アジア研究について概観するとともに、同センターの教育・研究活動を紹介することを目的とした。

まず初めに、このセンターが研究対象とする中央アジアとは具体的にどの地域のことを指しているのか、という点について整理しておきたい。まず旧ソ連を構成していたウズベキスタン、カザフスタン、トルクメニスタン、クルグズスタン、タジキスタン、さらにアフガニスタン、中国の新疆ウイグル自治区が中央アジアの範疇に含まれる。また、アフガニスタン

に隣接しパキスタンとの関係で多大な影響が確認できるためか、パキスタンの連邦直轄部族地域 (Federally Administered Tribal Area=FATA) も事実上は調査・研究対象に含まれている。これに加えて、前述のように中国とロシアをも研究対象としているため、非常に広範囲の地域の研究を行っている機関と言える。

同センターの機能は以下の三つに分類が可能である。第一に調査・研究機関としての機能、第二に教育機関としての機能、そして第三に様々な政策提言などを行う、パキスタン連邦政府直轄の機関としての機能である。

第一の研究機関としての機能について最初に述べる。このセンターの研究スタッフは10人である。以下、それぞれの専門分野について簡潔に触れる。センターの長 (Director) であるサルフラーズ・ハーン博士 (Dr. Sarfrāz Khān) は元々 20 世紀初頭のブハラを中心としたムスリムによる教育改革運動などを専門にしていたが、現在では部族地域やアフガニスタン情勢なども含む幅広い分野の研究を手がけている。以下、モハンマド・アンワル博士 (Dr. Muḥammad Anwar) はアフガニスタンや中央アジアの歴史全般を、ザーヒド・アンワル博士 (Dr. Zāhid Anwar) は現代中国の政治全般を、ペルベーズ・イクバル博士 (Dr. Pervēz Iqbāl) は現代ロシア政治を、バーブル・シャー博士 (Dr. Bābar Shāh) は現代アフガニスタン政治を、シャビール・アフマド博士 (Dr. Shabīr Aḥmad) はウズベキスタン経済や農業を、ファザル・ハヤート・タージ博士 (Dr. Fazl Ḥayāt Tāj) は中央アジアの農業をそれぞれ専門としている。上記の研究スタッフに加えて、以下で述べる語学教育担当のスタッフがおり、ウズベク語やウイグル語などの授業を担当しており親類が元々新疆の出身であるというモハンマド・アブドゥッラー氏 (Muḥammad ‘Abd allāh)、パシュト語やダリー語を担当するアブドゥッラー・ジャーン・ハリール氏 (‘Abd allāh Jān Khalīl) の両名がこの役割を担っている。

研究活動の成果は 1978 年に第一号が刊行され、その後も基本的に半年に一度刊行されている『中央アジア』(Central Asia : Journal of Area Study Centre (Russia, China & Central Asia) University of Peshawar) に掲載されている。この雑誌にはセンターのスタッフのみならず、パキスタン国内の著名な研究者や政府関係者たちなどが寄稿している。論考のテーマは中央アジアの現状や歴史、文化などであるが、大半はアフガニスタンや部族地域、そしてパキスタン北西部に関わる内容である。

次にセンターの教育活動について触れてみたい。このセンターには中央アジア学 (Central Asian Studies) の M.Phil. (Master of Philosophy) 及び、Ph.D. のコースが設置されている。学生は基本的に二つの Semester から成る一年間のコースワークを課され、Semester 毎にそれぞれの科目のレポートの提出と二回の試験を通過することが必須となっている。開講されている科目は年によって若干異なるが、調査研究方法論、及び二つの言語の授業は必須となっている。調査研究方法論は学術研究に必要な基本的な手法を教授する授業となっており、

言語は中国語かロシア語から一つを、ウズベク語、ダリー語、パシュトー語から一つの言語を選択することになっている。ただ、基本的に中国語は開講されていないため学生はロシア語とその他一つの言語を選択することとなっている。しかし、この言語学習に関してはそれぞれの言語の授業が週に一回しか行われず、しかも一年ほどで終了してしまうため、当然言語の運用能力に関しては導入程度の段階に留まり、実際の調査研究に使用できる水準とは程遠いものである。

授業の具体的内容としては、このセンターで扱う中央アジアやロシア、中国に関する基本的な歴史や現状に関するものが大半であるが、ウズベキスタンの農業や中央アジアの自然などに関するものも開講されている。しかし、実際の授業の議論などでは、やはりパキスタンとの関係や今後の展望に関心が集中していた。授業は月曜日から土曜日まで行われるが、金曜日に開講されているウィークリー・セミナーはこのセンターの教育活動の中でも最も特色のあるものである。このセミナーは、その名の通り基本的に週一回開かれ、パキスタン国内の様々な分野の専門家たちによる研究発表が行われ、その後軽食を交えて自由な討論を行うというものであった。専門家たちには大学教員やマスコミ関係者、それに政府関係者など様々な立場の人々が招かれていた。ただ、全体としてこのセミナーのテーマも大半がパキスタンの政治経済に関するものや、アフガニスタン問題、そして部族地域に関するものであった。わずかではあるが、新疆ウイグル自治区とパキスタンとの交易やカザフスタン経済に関する講演も行われており、中央アジアに関しても注意を払っていることが窺えた。

さて、前述のように、地域研究センターが果たす第三の役割として、パキスタン政府への政策提言を行う機関としての機能を挙げたが、そのための議論の場として様々なシンポジウムが頻繁に開催されていた。筆者の滞在期間中にはアフガニスタンやパキスタン北西部の情勢に国際的な注目が集中していたこともあり、アフガニスタン政治やパキスタン国内情勢に関するシンポジウムが多数開催されていた。このようなシンポジウムの際には、パキスタン政府のかなりの高官が参加して活発な議論が交わされることが通例であり、パキスタン政府関係者たちの認識などを知るには絶好の機会であった。このような政府関係者たちの中には、軍が多大な影響力を有するパキスタンの事情を反映しているかの如く、退役軍人が必ず含まれていたのが印象的であった。出席者たちの中にはパキスタンの情報機関として知られるISI (Inter-Services Intelligence) の関係者たちが含まれている場合もあり、彼らから直接アフガニスタンやターリバーンとの関係について意見交換をすることのできる場としても極めて有益であった。アフガニスタンや部族地域に関する情報交換等の目的のため、パキスタン駐在の各国大使館の関係者が参加している光景も多々見られた。(日本の関係者の参加は見られなかった。)

このようなシンポジウムの開催や研究成果の発表のためには開催のための資金が必要とな

るのは当然である。前述のようにパキスタンの連邦政府直属の機関であることから、政府からの資金援助があったことは疑いない。しかし、実際には政府からの資金よりも遥かに多額の資金を提供しているのが、ドイツのミュンヘンに拠点を置く財団である *Hanns Seidel Foundation* である。この財団はペシャール大学地域研究センターだけではなく、パキスタン国内に設置されている他の五つの地域研究センターとも密接な関係を有している。そのため、2009年夏には全ての地域研究センターの関係者たちが一堂に会した国際シンポジウムが、ペシャール大学・パーラーガレイキャンパスにおいて初めて開催されるということまで実現した。実は、地域研究センターがパキスタン各地に設立されてから30年以上が経過していたにもかかわらず、各々のセンターが連携して共同研究を行ったり、それぞれの研究成果を共有するという場を持つことが全く無かったのである。しかし、グローバル化が急速に進行する現在における地域研究推進のためには、地域研究センター同士の連携が欠かせないとして、ペシャール大学地域研究センターの主導の下、各地域研究センターの研究者たちや学生たちとの連携を今後は緊密化するということと、地域研究を各々の地域との有機的な結び付きを考慮しつつ実施していこうとする目的で、初の共同での国際シンポジウムが開催されることとなったのである。

ここで、研究機関として重要な要素であるペシャール地域研究センターの研究設備について触れてみる。地域研究センターには付属の図書館が設置されている。この図書館には中央アジアやアフガニスタン関連の書籍が多数所蔵されており、管見の限り、英語による基本的な文献や辞書・百科事典類は一通り揃えられている。さらに、ロシア語や中国語の文献も存在するが量的にはそれほど多くはない。やはりこの図書館の最大の特徴は、アフガニスタンに関する豊富な現地語文献の存在であろう。ダリー語・パシュトー語による貴重な出版物が所蔵されており、その中にはアフガニスタンで毎年発行されていたカーブル年鑑やアフガニスタン人民民主党が発行していた雑誌などの定期刊行物など、20世紀中盤から後半にかけての入手困難な貴重な出版物などが含まれる。歴史的価値のある図書としては、20世紀初頭より発行された本格的な新聞である『ニュースの灯』(*Sirāj al-Akhbār*) や、歴史書の『歴史の灯』(*Sirāj al-Tawārikh*)、その他にも代表的なアフガニスタンに関するペルシア語文献史料が所蔵されている。この他、アフガニスタンの言語学・民俗学研究等に有用と思われる民話や各種方言などに関する書籍（たとえば、ハザーラの言語であるハザーラギーに関する文書など）も所蔵されている。ただ、中央アジアやロシア、中国などに関する文献は質量ともにそれほど多くはない。また、この図書館には写本や文書などは所蔵されていない。図書館は基本的に誰でも閲覧が可能であり、センターのスタッフや学生に対しては貸出も行われている。図書館の状況が劣悪なペシャールにおいては、かなり充実した図書館と言える。ただ、図書館の蔵書に関して、どのようなものが存在し、また図書館のどの棚に配架されて

いるのかを知ることは不可能である。蔵書リストやカードが一部は存在するが全く役に立たない。図書館のスタッフも極めて協力的ではあるものの蔵書に関してはほとんど知識を有していない。つまり、自分が必要な書籍が存在するかどうかを知るためには、自分自身の目で書架を見て回って探す他手段がないというのがこの図書館の最大の欠点である。

この他、図書館に隣接する形でパソコンが数台設置されているものの、これらのパソコンは基本的には文書作成やインターネット検索などの用途で使用されるものであって、蔵書検索は現段階では不可能である。しかも、断続的な停電などによりこれらのパソコンはいつでも自由に使用できるというわけではない。

さて、筆者が感じたこのセンターの特色と問題点をまとめて提示したい。まず教育についてであるが、このセンターの課すコースワークは他のパキスタン国内の研究機関に比して極めて厳しい。そのため、毎年中途退学者が続出するのが常である。その反面、このセンターで博士号を取得した者はその後、研究者として極めて高い地位に就く傾向が確認できる。たとえば、ペシャーワル大学国際関係学部の学部長、パキスタン研究センターのセンター長、さらにはイスラマバードの名門カーエデ・アーザム大学の歴史学科の研究スタッフにもこのセンター出身者が存在する。当然、現在のセンターのスタッフにも同センターから博士号を取得した人物たちが含まれている。さらに、現在のペシャーワル大学の副学長（実質的な大学のトップ）も同センター出身であり、著名なパシュトー語の作家や詩人たちにもこのセンターで博士号を取得した人物が含まれている。従って、このセンターがパキスタン国内でもかなり高度の教育活動を行っていることは疑いない。

逆に教育機関としての欠点としては以下の二点が挙げられる。まず、中央アジア研究の拠点でありながら、学生の研究テーマがパキスタンに関連する事例に集中する傾向が顕著であるという点である。アフガニスタンや部族地域はパキスタンと密接な関係を有するためこれらのテーマを選択する学生は多いが、逆に中国や旧ソ連の中央アジア、あるいはロシアのことを専攻する学生はほとんど存在しない。さらに第二の欠点として、現地語史資料の運用能力の欠如が挙げられる。パキスタンの他の研究機関にも見られる傾向ではあるが、イギリス統治の影響を現在でも強く受けているためか、英語の文献のみに依拠した研究となる傾向が顕著である。上述のように、アフガニスタン研究に必須の貴重なペルシア語やパシュトー語の文献が図書館に所蔵されているにもかかわらず、これらの文献を活用できる能力を持った学生がほとんど存在しない。つまり、ロシア語、ペルシア語などの英語以外の文献を扱うことができる学生はほぼ皆無であると言える。ただ、研究スタッフには旧ソ連圏において学んだ者が4名おり、彼らはロシア語の高度な運用能力を備えている。カザフスタンからの政府代表団や在パキスタン・ロシア大使館の大使がセンターを訪問するなど、旧ソ連地域の関係者たちとの関係も維持しているようである。

以上のように、パキスタンにおける中央アジア研究は未だ基礎段階に留まっているが、地域研究センターの主導によって今後の研究が進展していくことを期待したい。

ペシャーワル大学地域研究センターの研究活動と授業については以下のウェブサイトを参照。

<http://asc.upesh.edu.pk> [2010年12月12日閲覧]

(上智大学大学院博士後期課程・日本学術振興会特別研究員 DC)